

のであるが)との関わりのなかに、兵法の意義を見いだそうとした。「兵は不詳の器」といえども、戦いのない時代に書き記される兵法書には、その時代の理想的な生き方が指南されているのだ。

日高 優

ひだか ゆう

立教大学 現代心理学部映像身体学科准教授 写真研究・映像身体学・表象文化論

前田英樹氏は、私が四年前に立教大学に着任したときの初めての大学院生向けのガイダンスで、「僕は一介の批評家です」と、静かだがはっきりとそう自己紹介されていたのを、私はその姿とともにいまも鮮明に覚えている。氏は、批評家小林秀雄がそう生きたように、何よりも批評家として物を書いてこられた。このことは実に驚くべき事実であり、同時に大学という場の真の豊かさを図らずも示し得ている。私たちにとって、これは記憶すべきことだ。現代心理学部という新たな学部、映像身体学科という新たな学科を創出した前田氏という立役者が、大学制度が根を張るようなところからは自立して、ただ一介の批評家、身ひとつで書く「独身批評家」たることを意志してその態勢をとり続け、これまでの仕事をされてきたのである。氏の仕事、数々の著作の中身はどれも、諸々の資料や知識、任意の理論とやらの「様々な意匠」を凝らした書き物を一気に色褪せさせてしまうものであることは、言を俟たない。前田氏の本を読めば、批評と映像身体学の態勢が重なって、それらが両者ともに対象に直に向かわんとするひとつの運動であること、こうした仕事に従事する困難を進んで引き受けるだけの意義も喜びもある仕事であることが実に深くわかる。

前田氏はいま、その円熟した筆を自在に振るい、批評家たる面目が躍如とする仕事「批評の魂」を、今年(2016年)の一月から月刊『新潮』に連載している。それについては最後に記すが、私がここで紹介したいと思っている本は、『定本 小

林秀雄』という本である。この本は、もとは1997年に刊行された『小林秀雄』の増補版で、「小林秀雄と本居宣長」、「小林秀雄の下学」という二つの文章が加わっている。「小林秀雄の絶筆」は、連載中の「批評の魂」のプレリュードというべき書きおろしである。

これまで小林秀雄を読んだことが無くとも、映像身体学を学ぶ学生たちには是非、本書を読んでほしい。というのも、本書は、プラトンの『パイドロス』の「巧みな料理人」の例を引き、肉が「肉それ自身が持つもろもろの質の差異を、実在するその「種類」を、彼の包丁に対して顕わしてくる」、そのような料理人の仕事を語ることから始めて、読者を批評という仕事の核心に立ちあわせてくれるからだ。つまり、強いられる問いの所与に対する回答という作品の秘密に迫り、〈問いの所与〉を分割して廻り、潜在的地点を捉えもする、そのような批評という仕事の核心に。批評は、映像身体学にとっては強力な武器であり、実在の手ごたえを確かめつつ進むその態勢と共振するものだ。

本書の要約などできないし、しようとしても意味は無いのでそれは書かないが、本書の対象とは言えば、小林秀雄の批評であり、その批評の対象——モーツァルトの音楽、西行や実朝、ドストエフスキーやトルストイの文学、特に映像身体学の学生の対象として直接かかわりの深いところでは、ゴッホやセザンヌの絵画、ベルクソンの哲学やフロイトの仕事など——である。そして、それらの対象を通して、歴史や死の潜在的出来事、「絵画記号」や絵画における「感覚の実現」、自然や身体の知覚、観ることと批評の本質的關係、持続する物質や度合の哲学の問いなどが、まさに「巧みな料理人」の手さばきで見事に掘り出されていく。氏の筆の運び、文勢の生み出す運動のなかで、実朝が、ゴッホが、つまりは小林秀雄の批評のそれぞれの対象が強いられた障碍は、読者自らの乗り越えがたい障碍となって立ちはだかってくる。だからこそ、回答としての作品のありようは、ありありと読者の内に浮かび上がる。そして、ベルクソンの再認回路の図ではないが、実在がその深さを顕わすのは、それを再認し知覚する行為の深さゆえ。前田氏の本の深さが真に読者に顕われ生きられるためには、読者自身の態勢、深さに降りていく読みのありようも問われている。実に恐ろしいことだ。

そもそも前田氏は、「私は、これまで長いあいだ、折にふれて小林秀雄を熟読してきたが、彼についてどんな本を書こうともまた書けるとも思っていない」そうだが、けれど氏は、「小林の批評文が、その対象とのあいだに創造する、あの比類ない秘密の関係を解き明かすことの困難」に対峙し書いた。それは任意の

解説でも読解でもあり得ず、対象につき従って為される批評であり、生きられるものを生きられるものとして掘み出す批評という方法、方法論ならざる方法を引き出す批評という、実に大きな困難を克服する仕事となっている。批評による批評、批評家による批評家の本たることが求めた極度の精神の緊張が読者の内に流れ込み、よほど鈍重でないかぎり、畏怖を覚えることなしに本書を読むことは難しいだろう。身に入れて真に読むことを求めるならば、畏怖すべきを畏怖と感じることが出来る喜びが、その恐ろしい筆の力、運動が、読者の内に与えられるはずだ。

本書のために書き下ろされた「小林秀雄の絶筆」についても、触れておきたい。強いられる問いの所与をとらえ、作品が生成してくるその運動をつかみ出す批評は、実在と接触する手ごたえに満ちている。前田氏は、本書の前の方、「小林秀雄の絶筆」とは別の個所で既に、次のように書いている。「しばしば小林が、批評を学者の「研究」によりも、はるかに生活の知恵に近いものとして語」っているが、このような生活の知恵は「まず問いの所与に過つことなく襲われる能力を持ち、次にそれを克服する技術を持っている」。そして、「その受動性のうちには、〈生活〉が誤りなく確保する実在との接触があると言ってよい」、と。「小林秀雄の絶筆」を書く前田氏を導くのは、やはり小林秀雄の生活に実在するものへの信である。それが、小林秀雄が正宗白鳥と、トルストイを巡って「思想と実生活論争」を戦わせることになったところのものだ。小林は、白鳥に反発して書いた、「あらゆる思想は実生活から生れる。併し生れて育つた思想が遂に実生活に訣別する時が来なかつたならば、凡そ思想といふものに何んの力があるか。大作家が現実の私生活に於いて死に、仮構された作家の顔に於いて更生するのはその時だ」。この小林の信念は、後年になり、「白鳥への深まる一方だった敬意にもかかわらず」、少しも変えられることはなかったという。前田氏の筆で、「白鳥が批評の先人として示し切った態度」がそれとして浮き彫りにされ、白鳥の真意の在り処を小林が観るのに熟するだけの時間が、記憶が、読者に湧き上がるように立ち現われる。私もまた、本書を読むことの行為において、熟するに少し生きた、とさえいうように。そうして生成の運動へと送り返す氏の批評で、「思想と実生活論争」は、白鳥と小林というふたつの分化した批評の魂と魂とが為したひとつの運動、そうであるほかなかった運動として、もとの実在の鼓動を刻み始める。

「小林秀雄の絶筆」に氏が書くように、批評家は、対象を観つづけて同道し尽した結果、自ずと対象と袂を分かつたねばならない。そこから、批評家の天分が、

批評家の己が否応なく姿を顕わす。同道するという、無私の行為の果てに、である。そのようにしてキリストに同道する内村鑑三が、内村に同道する白鳥が、白鳥に同道する小林が在って、小林に同道する前田氏がまた在る。小林の揺らぐことなきフロイト観も氏によって引き出され、治療のために己を生贄にして観つづけた先で人格否定者とも誤認されたフロイト、「己を決して語ることのなかった」「この大著述家」フロイトの自伝も、優れた批評家の人格を顕わしてくる。「人生いかに生きるべきか」、己の前で逃れることのできないこの問いをまっすぐ進んで引き受ける、そのような批評の魂たちが呼び出されてくる……。

この「小林秀雄の絶筆」をプレリユードとするようにして、前田氏はいま、『新潮』に「批評の魂」を書き継いでいる。毎回の章題を記すだけでも、その仕事の厳しさと深さ、魅惑が窺い知れる——「第一章・独身批評家として生きること」、「第二章・己を顕わす、ということ」、「第三章、第四章・対象を持つ、ということ（その一、その二）」、「第五章・批評は、いかにしてその言葉を得るのか」、「第六章・一身にして二生を経ること」、「第七章・紛れる事無く唯独り在る人」、「第八章・己を回顧すること」、「第九章・翻訳文学者たること」、「第十章・魂アナロジーに類似を観ること」、「第十一章・批評が信仰を秘めていること」、「第十二章・〈士大夫の文学〉が在ること」と、続く。強いられた所与の問いの過酷、それへの回答が生み出す創造の爆発力、ロシアと日本の近代文学が分け持つ困難と共感などがそれとして書かれ、活き活きと新たな相貌で躍動する批評の魂が呼び出され、その批評の系譜が引き出され明確に書かれてくる。そして、対象を観、己を観る批評の魂をもつこと、批評家の天分を生きることが、それを与えたものへの信を生きるということ、潜在性への信を生きることの深みから明らかめられる。自らもその信に生きんとする志操堅固の批評家前田氏に、身ひとつを術とする新陰流剣術家というもうひとつの顔が重なる。前田英樹氏は、自らの批評に身ひとつで生きている。

『定本 小林秀雄』に収められた「小林秀雄の下学」によると、『論語』の「憲問第十四」に言う「下学して上達す」とは、「己の身ひとつの経験に、直接与えられたものの在る場所」から、「下から、低いところから学んだ者だけが、高い所に達する」、ということだ。「下学」だけを信じて疑わず、「上達」への道を歩きとおした人間は、かしこ畏く恐ろしい。その明確な実例を、前田氏は小林秀雄に観たというが、私は氏よりほかに、そのように歩く人をまだ観たことが無い。批評の原理を突き進んで書き、小林が向かう対象の精神の運動を読者に直接流入させる『小林秀雄』の刊行から、既に二十年近くが経った。その後の生きられた年月をも賭け

て、氏は小林の批評対象と批評家小林とを生きる、生きさせる、そのような一層自在になった一筆一筆で静かにひたひたと書き進み、批評の魂の实在を明確にする。「批評の魂」は、氏が立教大学を去られて間もなく連載が完結し、単行本化されると聞いた。私はいまからもうそれを心待ちにしている。

解題 | 前田英樹『ベルクソン哲学の遺言』

岩波書店、2013年

山本 尚樹

やまもと なおき

立教大学 現代心理学部映像身体学科助教 発達心理学・生態心理学

078

立教
映像
身体
学
研究

5

鉛筆をカッターナイフで削る。木目の流れか、思わぬところまで刃が届いてしまう。または、少し硬い部分があり刃が思うように通らない。黒い芯が出て先端の形があらまし整うと、カッターと鉛筆の持ち方を変え、小刻みに刃を滑らせて芯をとがらせる。「鉛筆を削る」、そう言葉にするとなんということはないが、いざ鉛筆を削るとなるとちょっとした「障碍」に次々に遭遇することになる。ここでは鉛筆を例に挙げたが、絵画や映像作品など何かをつくる場面では、大なり小なりそうした障碍と関わらざるを得ないのではないか。もちろん、絵の具や筆、撮影機材が勝手にならないということもある。それに加えて、自分は今回この作品で何を表現したいのか、どのような方向性で製作を続けたいのか、そうした制作の「テーマ」というものもある。テーマというと、作者の頭のなかにある表現意図と思われがちだが、すんなりと作品に示されるものというよりは、まさに作家が格闘しなければならない障碍のことである。

このように障碍と格闘し続けるのは、作品をつくり出す作家だけではなく、いわゆる哲学者や科学者と呼ばれる人も同じなのではないのか。彼らはすでにある理論や図式で物事を思弁的にただ説明しているのではなくて、「物はどうのように動いているのか」「心とは何か」といった、我々が普段気にも留めないことにつづかってしまい、格闘しているのではないのか。障碍に出くわし格闘するという点